

CELTAーロンドンでの CELTA コース参加報告

愛知県立大学非常勤講師 和田珠実

はじめに

本報告は筆者が2008年8月4日から29日までに参加した内容をまとめたものであり、2010年8月11日に高等言語教育研究所主催の言語教育研究会で口頭発表したものに基づく。

参加目的

筆者は約20年の英語教員経験において、これまでの慣例を見直し、より効果ある実践的な教育法(授業方法)を習得したいと思っていた。これが今回のCELTAへの参加目的である。

1. CELTAとは

The Cambridge Certificate in English Language Teaching to Adults が正式名称であり、イギリスのケンブリッジ大学が正式に認可している成人向け英語教授法資格である。世界54カ国286か所で受講可能であり、毎年約900のCELTAコースが開講され、約1万人が受講している。(参考: University of Cambridge ESOL Examinations のサイト <http://www.cambridgeesol.org/japan/exams/celta/index.php>) なお、CELTA修了者は同分野においてさらに深く資格を得ることを学習するDELTA, The Diploma in English Language Teaching to Adults というコースもある。CELTAのコースの大まかな目的は、成人学習者への効率的な英語教授法習得であり、その内容は授業準備、プランニング、学習者の理解と対応、言語分析、効率的な授業運営、管理、教材使用、作成などである。

1-1. 受講資格

18歳以上で高等教育に十分な教育または職務経験と十分な英語力を持ち、一次審査となる書類および面接審査(遠隔地の場合は電話審査)に合格したもの。

1-1-2. 書類、面接審査

A4サイズ2枚の履歴書、2枚の語学知識レポート(language awareness task)がある。それらは学習者の間違いを指摘し、どのように教えるかを問うものと、文法の違いである。

例:

1. Correcting a student's mistake

- “I'd like some informations about your courses.”
- “Is John ill? He's lost a lot of weight.” “Yes, he is rather slender these days, isn't he?”

2. Helping students understand differences in meaning

- If I had the money, I'd buy a new car. / If I have the money, I'll buy a new car.

3. 300words (either a successful or an unsuccessful learning experience)

書類審査合格の後、30分ほどの面接があるが、遠方で無理な人に対しては電話で行われる。私の場合は40分間ほどで、書類審査内容同様の language awareness task を電話で問われた。これらで、英語力をチェックしているため、同じコースを受講していたスイス人はこの電話審査でコースに参加しても良いがケンブリッジの資格を得ることは不可能だとこの段階で告げられている。さらに、受講前課題があり、language awareness task 同様の問題を100問ほど解かなければならない。

2. コース概要

2-1. 期間

4週間、120時間で100%の出席率が要求される。

2-2. 実習生

1クラスの最高定員は15人、8月のコースは夏休みのため人気があり、私が受講した International House London では午前の部2クラス、午後の部2クラスが開講されていた。受講者は native とみなされる11人(イギリス人9人、オーストラリア人1人、南アフリカ人1人)と中学からイギリスに住んでいるスペイン人、ブラジル人、スイス人、そして日本人の non-native が4人のクラスであった。集中コースで毎日授業準備が厳しいコースであるため、課題の提出が滞っていたブラジル人の受講者は折り返し地点の2週目で学校よりこのまま続けても資格は無理だとはっきり言われ脱落してしまった。年齢や職業に関しては、半数は大学新卒で22歳くらいであり、他は20代後半から30代前半で、レストラン経営をやめてイタリアに英語を教えに行きたい人や、鉄道会社勤務をやめて中国に英語を教えに行きたい人など様々なバックグラウンドの人々であった。英語教師歴のある者は私以外では1人のオーストラリア人と1人のイギリス人であり、彼ら2人ともが日本の英会話学校で英語を教えていた人であった。

2-3. 指導者

各クラスには trainers と言われる指導者の先生が3人付き、全員が日本や中国、ヨーロッパで教えた経験を持つ。二人が授業と実習を担当し、もう一人は director で実習のみ担当にあたる。

2-4. 生徒

実習授業の生徒は海外からその語学学校に正規に英語を学びに来ている生徒や、ロンドン在住の人が受講可能で授業料は無料である。クラスの生徒数は約10人くらいで行われる。

2-5. 評価

実習と、4つの writing 課題で評価され Pass A, Pass B, Pass が最終資格評価となる。

3. 授業と課題

3-1. 内容

方法論と言語分析のインプットセッション、および実習の2本立てからなる。授業は12時から13時と13時15分から14時30分、グループ内レッスン計画時間は14時30分から15時15分である。実習が16時から18時、その授業のフィードバックが18時から18時30分まであり、

さらに、正規授業見学が3回、9時から11時までである。全ての実習は指導者とクラスメイトに参観される。1クラス15人を5人毎の3つのグループに分け、そのグループ毎に同じクラスに実習を行う。グループ内レッスン計画とは、実習のテキストは教えるレベル別に違い、どこの課を行うかは数日前にわかる。2時間の実習を2人ないし3人で行うため、テキストのどこからどこまでを誰が担当し、どのようなアクティビティやタスクを行うかを担当実習員同士で相談、計画する時間である。時間割上は休憩時間があるようだが、実習準備に追われれば全員が休憩なしというのが実情であった。実習後のフィードバックは、まず実習担当者本人、次に見学したクラスメイト、最後に指導者の先生がフィードバックを行う。その後指定のレポート用紙1枚に自分の感想、反省、次回レッスンへの目標等を書き、レッスンプラン、ハンドアウト等授業で使用したものを全て指定のフォルダーに指示通りに入れ提出する。また4週間のうち3回は午前中にその学校で行われている正規の授業を2時間見学することも必須である。さらに外部評価と言うものがあり、ケンブリッジ大学から2人の監査員が最後の週に来校し、コースチェック、授業および実習見学、提出フォルダーチェックを行う。これは学校の管理チェックであり、直接的には実習生のチェックではないということであり、資格取得の信頼性や正当性保持のためである。

授業内容:

Day 1	Getting to know you	Teaching Focus Introduction to TEFL: principles and techniques
Day 2	Teaching Focus How to get students interested in the topic of the class	Teaching Focus Learner styles & Motivation
Day 3	Teaching Focus How to use a text in class.	Planning and Materials Lesson Planning Staging & Aims
Day 4	Teaching Focus How to look at language from a text	Teaching Focus How to set up tasks and help students with tasks
Day 5	Exploring Language Introduction to Meaning Form Pronunciation Appropriacy	Planning Workshop Planning a lesson using 'topic, text and task'
Weekend	Lesson Preparation Complete assignment 1	Start assignment 2
Day 6	Teaching Focus How to use text Tasks to use with texts	Exploring Language Anticipating problems students have with meaning
Day 7	Teaching Focus How to help/check students understand the meaning of lexis/grammar	Exploring Language Anticipating problems students have with form

Day 8	Teaching Focus How to help/check students understand/use form of /lexis/grammar	Teaching Focus Tasks for language practice How to manage feedback stages
Day 9	Teaching Focus Tasks for spoken fluency How to manage feedback stages	Exploring Language Anticipating problems students have with pronunciation
Day 10	Teaching Focus How to help students with pronunciation	Planning Workshop Planning a lesson using ‘topic, text and task’
Weekend	Lesson Preparation Complete assignment 2	Start assignment 3
Day 11	Teaching Focus Task based learning	Exploring Language Phonology: sounds and the chart
Day 12	Exploring Language Phonology: features of connected speech	Teaching Focus How to teach writing1
Day 13	Exploring Language Grammar – modal	Exploring Language Spoken and written discourse
Day 14	Exploring Language Lexis and lexical approach	Teaching Focus Workshop: Clarifying language
Day 15	Teaching Focus Review: Meaning feedback and correction How to help students with pronunciation	Planning Workshop Planning a lesson using ‘topic, text and task’
Weekend	Lesson Preparation	Complete assignment 3 & 4
Day 16	Teaching Focus Testing and Exams	Learner Focus Different teaching contexts
Day 17	Career Focus Job talk	Teaching Focus Literacy
Day 18	Teaching Focus Business English and 1:1	Computer aided language learning
Day 19	Career Focus Adapting to a 25 contact hours a week	Learner Focus Young learners

*1日祝日のため授業日短縮

課題

1. Focus on the learner, a case study
2. Language related tasks
3. Language skills related tasks, authentic materials
4. Lessons from the classroom

上記1、3、4が 750 から 1000 語のレポート課題である。1では1週目の生徒の中から一人を選び、授業内の観察と一度の面接からその生徒についての英語力を判断し、弱点を伸ばす

ためにどのようなアクティビティや問題、学習方法を提供するかを述べる。2は文法、語彙の分析 Concept Questions の作成をする。3は authentic material を使用したレッスン計画であり、その中には receptive skill1つと productive task2つのハンドアウト作成、教材とすべての理由を論ずることを含む。4は自分の実習からの弱点、強化すべき点、長所と正規の授業、クラスメイトの授業見学から学んだこと、そして今後英語教員として必要なことのまとめを論ずる。

4. 実習

3レベルの生徒に合計6時間のレッスンを行う。例えば、1週目は中級レベルクラスに 25 分間レッスンを1回、40分を2回、2週目は中級レベルクラスに40分レッスンを1回、上級レベルクラスに40分を2回、3週目は上級レベルクラスに40分を1回、初級レベルクラスに60分、4週目は初級レベルクラスに60分行う。

5. 実践例

5-1. M.F.P. & C.Q.

コースで習得した語彙の教え方の例を二つ紹介したい。必ずどの語彙にも MFP を行うように指示される。M は意味、F は品詞、規則不規則、collocation、スペル、P は発音である。語彙に対しては elicit しすぎるより、test(例えば matching), teach(study), test の3tで行い、elicit するならば、ヒントを十分与えてからが望ましい。新しい単語を教えるのに2分くらいかけるのが適切である。もうひとつは理解確認をするための C. Q. Concept Questions という指導法がある。例えば souvenir で行うと次のようになる。教師”Do you buy these every day?” 生徒”No” 教師”When do you usually buy them? After work, or on holiday?” 生徒”On holiday” 教師”Do you buy them for yourself or for other people?” 生徒”For both” 教師”Tell me what souvenirs you bought in the past.” 生徒”A doll, a pen, a post card…” 教師”What souvenir would you bring back from Paris?” 生徒”A model of the Eiffel Tower” これは語彙だけでなく、文法習得確認にも同様に使用できる。used to で行うと、教師”Does he play football now?” 生徒”No” 教師”Did he play football in the past?” 生徒”Yes” 教師”Did he play once or many times?” 生徒”Many times”というように短い答えで回答することが要求される。

5-2. R.I.C.H.

RICH とは regroup, instruction, check, handout を意味する。明確な指示を出すために、まずは regroup グループやペアにする、次に instruction 指示を簡潔に間を取りながら言う、リピートするときは同じ言い方で行うようにする。そして 生徒が check 指示を理解できたかを、Do you understand? Is that clear?とは聞かずに最初の一間を elicit しながら行ったり、生徒に行うことを述べさせる。handout は指示や説明の後に配る。

6. 自身のフィードバック

6-1. Reduce echoing

生徒の答えをリピートしない。少しでも生徒が話す時間を増やすためには時間の無駄であり、間違いをリピートすることにより他の生徒はそれが正解であると勘違いすることを避けるためである。

6-2. Monitoring

生徒を良く観察する。Monitor at eye level ということで、学習者がアクティビティやタスクを行っているときに立って上から何かを指示、注意するのではなく、なるべく近くでモニターし、メモを取る。ただアジア人の学生にはこれは不評なようである。教師が近くにいると緊張したり、マークされていると思ったり、気が散る場合があるため、このような場合は臨機応変に行う。

6-3. Drilling

Drill 回数を増やすこと。語学学習では、教師は自分がいつも同じことをやっているために飽きてしまいがちで、発音練習も2回くらいですぐに次の単語にいつてしまう傾向にあるが、新出単語は何度も発音しないと習得できない。教師はドリルの際に生徒全員が見えるように立つ、あるいは座る。まずは生徒に monitor させる、全員でリピート、何人かに言わせる。長い単語はシラブル毎に指を使用していくつのシラブルかを示しながら、1com, 2comfort, 3comfortable, のように指導し、How many syllables? Where is the stress?と必ず音節、ストレス指導もする。この指使用はエラーコレクションにも役立つ。例えば I went school yesterday. の文で to を入れることを生徒に気付かせるためには、そこに何か入ることを指で示す。

6-4. Student centered

文法など教師中心で説明をすることが多いため、生徒から発見や違いを引き出したり、考えさせるという授業展開にする。

6-5. Time management

1つの授業内に1つのターゲットを決め、同時にあれもこれも説明しない。的を絞るようにする。

6-6. Visual support

picture, gestures, realia, facial expression, white board, pc board をもって使用することは多言語クラスでは特に効果的である。

ほかに、どのような答え合わせも、いきなり1人の生徒をあてるのではなく、まずはペアの人とチェックさせる。自信のなさや恥ずかしさの克服は語学習得に欠かせないものであるため、学習者に対しての配慮は常に忘れてはいけないことを再認識した。

7. さいごに

このコースは本来、教員未経験者を対象としたコースであるため、初心に戻り長年の教師経験で染み付いてしまった多くのことを見直せた点が一番の糧となった。このコースで学び現在も授業で実践していることは、ハンドアウトは説明の後に配付するといったことや Concept Questions 等の技術面は色々ある。また他人の授業を見学し、自分の授業を見学されたことから一番多くのことを学べた。よって今後もどの授業でも、いつも肩に誰かが乗って見ていると思っ授業を行うように心がけたい。